

環境問題と真善美

一丸節夫

人間の理想としての普遍妥当な価値として、認識上の真と、倫理上の善と、審美上の美をまとめ《真善美》という。

地球温暖化を例にとり、この問題を考えよう。

自然科学の見地からすると、それはエネルギーの還流問題である。つまり、太陽から入射する光のエネルギー、地球の放射する熱エネルギー、それに化石燃料の使用で発生する熱エネルギーと二酸化炭素、それらすべてが、大気・海洋・バイオマスをつむぐ地球上の【生物圏】の動態や進化と絡み合い、地球環境をどのように変転させるかという問題である。

地球温暖化は社会科学上の問題でもある。経済上、政治上、さらには安全保障上の問題であるという人もいる。その分野での基本量は、“価値”という、あいまいさを多分に含む変量である。

人類をつむぐ地球上の生物の生育環境を形成する生物圏とは、植物と岩石、菌類と土壌、動物と海洋、微生物類と大気が、互いに影響を及ぼし合い、絡み合い、織りなした大系であり、科学の見地からも最も複雑なシステムだ。だから、何が事実かについてさえ、専門家間で意見が分かれる。そしてその食い違いの根には価値観に関するより深刻な食い違いがある。その相違を思いきり単純化すれば、“自然中心主義者”と“人間中心主義者”の価値観の相違と言える。そして、同じように単純化した認識では、それは“真”と“善”の相克とみることができよう。

自然中心主義者は自然がすべてを心得ていると

信じる。物事の自然な秩序への敬意こそが彼らにとっての最高の価値である。人間が自然環境を踏みこむ行為はすべて悪だ。化石燃料の過剰な燃焼と、それがもたらす大気中の二酸化炭素の増加は、まぎれもない悪事となる。

人間中心主義者は人間が自然に不可欠の一部だと信じている。人間は、その知性で生物圏の進化の過程を左右する鍵を握り、人間と生物圏が共存共栄できるよう自然を再編成する権利をもつとさえ考える。だから、人間中心主義者は、人間と自然の知的な共存に最高の価値を見出す。最大の悪は、戦争や貧困、低開発や失業、そして人間の機会を奪い自由を制限する病気や飢餓である。

生物圏を地球の研究と生命の研究を結びつける上での中心概念に育てた（旧）ソ連のウラディミール・ヴェルナツキー（Vladimir Vernadsky: 1863-1945）は、生物圏が徐々に【人智圏】に変化することを予見した。人智圏とは人間の知性により進化変遷をとげた地球生態環境のことである。

21世紀に入り地球上の気候変動が激化し、それにともない生物圏でも、自然科学上の“不安定現象”ともみろべき、さまざまな非可逆的変化が顕れている。だから、前世紀なかば 1945 年に没したヴェルナツキーには、このような地球環境の破滅的激変は想定外であったかも知れない。

“美”の出番は、人間と自然の知的な共存を求め、自然中心主義的価値観と人間中心的価値観の調和をはかることにあるのではなからうか。ヴェルナ

ツキーの信じた“人間には人智圏の維持の重責を
果たすだけの能力がある”が試されるのは、私たち
人間の今後の行動にかかっている。